教職課程センター紀要　第2号　7－12ページ，2017年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.2 7－12, Dec. 2017

論　　文

中学・高校の特別活動の現状と課題

The Present and the Problem of Special Activity in Junior High School and High School

大谷　猛夫

Takeo OHTANI

Key words：self-goverment, obedience, shool-event

1．はじめに

中学・高校の特別活動の実態を直視し，そのとりくみの状況を目的にてらして考えたいと思う。特別活動は学習指導要領によって位置づけられている。学級活動・生徒会活動・学校行事に分けられている。

本稿では，このうち，学校行事に絞って検討したいと思う。子どもたちが卒業して数十年たって，クラス会を催した時に，学校時代の思い出として語られるのは，必ず学校行事である。教科の授業の時の「思い出」が語られることは少ない，いやほとんどない。それくらい学校行事は子どもたちにとって，ずっと心に残る貴重な体験である。

学習指導要領の「特別活動の目標」の記載は次の通りである。「望ましい集団行動を通して，心身の調和のとれた発達を図り，個性を伸張するとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度を育てる」

この目標を検討することにする。「望ましい集団行動」とは何だろうか。「集団の一員としての自覚」とはどういう自覚だろうか。「個性の伸張」と両立するのだろうか。望ましい集団行動，集団の一員とくれば，一糸乱れぬとなり，規律に従う，まわりに迷惑をかけない，などということが連想される。そうでなければ「自分かって」ととられ，同調圧力がかかる。今，学校の中で学校行事を通して，皆にあわせる，ことが良いこととされ，個性を発揮していくことは良くないこととされている傾向がある。特別活動は「集団訓練」と称して，教師（あるいは）リーダーの指示をそのままただちに実行することを要求される。戦前の軍隊と同様のことである。「上の者」の指示を自分の頭で考えずにすぐさま実行することが要求される。「上官の命令は天皇の命令」と命じた日本軍の手法と同様である。体育祭の入場行進，卒業式の号令，など何の意味があるのかわからない行為を強要される。子どもにとって，意味もわからず，やらされることは何の価値もない。

これに対して「協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度」に着目すれば，子どもたちが自主的に考え，協力して行動することを求めるとりくみがいっぽうでは考えられる。学校現場では，この「集団訓練」と「自主的なとりくみ」がせめぎあってとりくまれている。子どもたちが卒業後，思い出として語り合えるのは自主的なとりくみをおこなってきたものにかぎられる。「やらされてきた」ことは仕方なしにやってきたことなので，定着はしない。私は2007年より教職課程の「特別活動の研究」の授業を担当している。受講した学生の声を中心に現在の中学・高校の特別活動とりわけ学校行事の現状を分析したい。文中の斜字は学生の意見をそのまま記載した。

2．学校行事のとりくみ・・・感動を体験する

学校行事は「体育的行事」「文化的行事」「儀式的行事」「旅行的行事」「体験的行事」の5領域がしめされる。どの行事でも子どもたちが自主的にとりくんでいるか，

やらされているだけなのか，の分水嶺がある。「体育祭の入場行進」はほとんどやらされているだけである。体育教師の号令で音楽（行進曲）にあわせ，校庭を行進する。子どもたちはほとんど教師の命令に従うだけである。ところがこの体育祭の入場行進を楽しく生き生きやりました，という学生がいた。どうしてかを尋ねると，「体育祭の入場行進は来賓の採点があり，各クラスのくふうでメーンに来たときにパフォーマンスが各クラスで認められていて，そのパフォーマンスをクラスで考え，自主的にとりくんだので，とても楽しかった」というのである。これは体育教師の号令だけで従わせようとするのでなく，生徒の自主性を尊重した教師側のくふうの一例であると思う。同じ体育祭の入場行進でも教師側の姿勢で生徒の自主性をひきだせるとりくみとなる。

どの行事でもとりくみの最初の原案は教師が職員会議で検討する。ところが，この職員会議の討議がまったく形式的なものになっていて，何のためにその行事にとりくむのか，真面目に議論することはほとんどない。原案提出者は「昨年のとりくみ」の日付けだけなおしてそのまま提出している例がほとんどである。その年の生徒の実情，その年の教師の思い，などが考慮されることはほとんどない。ここでもっとも大事なことは「とりくみの目標」である。原案はこの提起もほとんどない。議論もおこらない。したがって「例年通り」のとりくみとしてすすめられる。ここで議論されるのは，細目である「教師の分担」などの施行細目にかぎられる。体育祭の原案で「目的」が議論されることはまずない。こまかなテントの配置をどうするか，準備の担当はだれがやるか，特点配分をどうするか，などのことばかりなのではないか。これらの細目は分担が決まれば，担当者まかせにしてすむことがほとんどある。

ここから生徒にとりくみを提示する時，実行委員を組織するかどうかも鍵になる。各クラスから実行委員を募り，そこで，体育祭についての相談をはじめるかどうかである。そうではなくて，体育の教師がすべて掌握し，体育の授業の延長線上ですすめていくだけであれば，生徒はやらされている「感」をぬけだすことはできない。実行委員を組織しても教師の指示を代行するだけの実行委員もみられる。実行委員は本来なら「体育祭の目標」も生徒に考えさせ，どんな体育祭にしたいのかを生徒自身のものにしていくことから始めるべきである。そして「種目」の決定もこの実行委員会にゆだねる。各クラスからの希望をとり，学年で重なった時にはどういうルールで決めていくかも相談し，学年種目も決めていく。もちろん「集団的なとりくみ」が大事なので，団体種目を重視する。クラスの練習やとりくみのくふうが結果にあらわれるような種目が良いと思う。練習すればするほどうまくなり，くふうすればするほど得点があがる，という種目がよいと思う。たとえば「大縄跳び」「むかで競争」など全員でとりくめて，練習の成果がでるものがよいと思う。「大縄跳び」は飛ぶ順番，号令のかけ方，などがポイントになる。「全員リレー」なども団体種目としているが，これなどは個人の力量が大きく左右されるので，事前に優勝候補が推定されてしまう。

得点配分も個人種目より団体種目の配点を重くする。子どもたちが意欲をもって練習し，がんばってとりくむことになるからである。また，クラス対抗にするか，カラー対抗（各学年たてわりのクラス編成で対抗）とするかも体育祭がダイナミックにとりくまれるかのポイントになる。問題行動に悩んでいる学校は他学年との接触を避ける，という意味で学年のクラス対抗でおこなっている。これなどは同時に同じ場所でやっているが，学年ごとに得点も決まっていて，学年行事にしかならない。全校たてわりのとりくみになれば，他学年の種目も自分たちの勝敗にかかってくるので，上級生が下級生の応援をしたり，練習のアドバイスをしたり，全校ぐるみのとりくみとなる。さいきんはもっと「ひどい」に形式があらわれている。全校紅白対抗として，各クラスをふたつに分け，全校をそしてクラスも紅組と白組にわけてしまう。こうなると，担任教師はどちらを応援して良いかわからない。準備の指導は担当教師がたいへんだが，担任の出る幕は少ない。個々の教師の分担はとても楽になる。担当教師（たいていは体育の教師）にまかせておけばよい，というのである。

これでは，練習の時のクラスのとりくみ，準備のとりくみなど生徒が自主的にとりくむ場面をつくりだすことができない。

そして，体育祭に到る練習のなかでのクラスのとりくみがとても大事になる。多くの場合，どのクラスも「優勝めざしてがんばる」ことになる。練習のくふう，ができるかどうか，どうすれば高得点をめざせるかがだいじになる。しかし，クラスに障がいをかかえた子がいた場合どうだろうか。優勝をめざすことにしても難しい。練習の時どうするか，「おまえは体育祭の日休め」とまわりの子がいうか，そんなことはできない，練習の時にどんなくふうができるだろうか，大縄跳びをどうやって一緒にとぶことができるか，こんな時子どもたちはすばらしい発想をすると思う。力持ちの子にゆだねて一緒に

ジャンプできるか，さまざまな知恵を出す，そして，このクラスでは優勝できなくても「全員で飛んだ」という共通体験は何者にも代え難い「感動」を子どもたちにもたらすはずである。優勝できなくても感動できる体験をした子は特別活動の目標を達成している。

次に文化祭をとりあげよう。文化祭も体育祭に準ずる。子どもたちの自主的な参画が第一である。実行委員会をつくり，自分たちの計画をつくりあげる。体育祭と違うのは，自分たちの発信する「文化」の内容が問われることになるからである。自分たちの日常生活から出発したテーマでとりくんでいく必要がある。「いじめ」問題のアンケートをとってまとめて発表することも良いかもしれない。「平和」の問題を考えて，まとめて発表するなども考えられる。劇で発表する時には，シナリオが最大の問題である。中学・高校の演劇脚本集も市販されているが，自分たちのシナリオで演劇にとりくめればすばらしい。中学生ぐらいになれば，脚本を書ける子がでてくる。

ところがテレビのものまねをするばかりの文化祭が増えている。子どもたちの文化の発信ではなく，マスコミの受け売りになっている。「おばけ屋敷」と「模擬店」が定番になっている文化祭がみられる。子どもたちが自主的にとりくんでいる，言ってしまえばそれまでだが，マスコミ・テレビ文化の子どもたちへの浸透はすさまじい。これに対抗して，独自のその学校の，その子どもたちの文化の発信が必要になってくる。「演劇」にとりくむ時，キャストをどうするか，大道具・小道具をどうするか，音響をどうするか，なども決めなければならない。そして練習である。

子どもたちはこうしたとりくみの中で，うまくいかない矛盾の場面を体験する。放課後練習しよう，という時に「塾があるから・・」と帰ってしまう子がいる。そういう時にまわりの子がどういうアプローチをするのか，話し合ってこの矛盾を解決し，目標にむかって皆で努力する，このことを体験することが貴重な体験になる。人間関係を学ぶということになる。次の学生の体験がそれを端的に表している。

・*中学の時の文化祭，合唱コンクール，体育祭をふりかえってみると，毎年必ず辛いことがあり，でも最高の思い出として残っている。矛盾がおき，それをどう解決していくか，ということを考え，行動し，おわったあとの達成感はとてもすばらしい。先生からの一言がずっと心に残っていたりする。*

・*運動会や文化祭は，非日常的な活動だったため，すごく思い出に残っている。特に高校生活最後の文化祭の演劇はとても思い入れが強いし，クラスがひとつになったと思っている。これらはみんなでやるからこそ，人数分以上のものが出来上がったし，問題解決していくことで，クラスの絆が深まっていくのだと思う。*

3．何のための行事か

卒業式のとりくみが各地で問題になっている。学習指導要領には「卒業式」となっているが，全国の学校では「卒業証書授与式」としている学校がかなりの数にのぼっている。「証書」は生徒にとって「授与」されるものだろうか。授与式ではあきらかに授与する主体が中心になる。「国歌」斉唱が問題になっている。式次第に「国歌」斉唱をいれないと教育委員会からの強い指導がはいる。「特色ある学校づくり」が標榜されているが，「特色のない卒業証書授与式」となっている観がある。卒業式に「国歌」が必要がどうか，「校歌」で充分なのではないか。

卒業式の中心はあくまで卒業生である。学校長式辞が最初にある。開口一番何というだろうか。ふつうは「卒業生の皆さん，卒業おめでとうございます」だろう。ところが校長が開口一番「本日は来賓のみなさんにご臨席いただきありがとうございます」という例が多い。つづけて「さて・・・」と続く。来賓に感謝する必要はない，ということではない。順序の問題である。これでは卒業生より来賓を大事にしていることになる。卒業生は二の次になっている例が多い。卒業式のとりくみも自主的にやっているところもある。「卒業生のわかれのことば」（答辞としている学校が多いが）も生徒が集団でつくっている実践もある。「別れのことば作成実行委員会」を組織し，生徒全員に原稿を書いてもらう。これを実行委員会がシナリオに作り直す。これをだれが読むかも生徒が選出していく。各クラスから複数の代表でこの「わかれのことば」を読んでいく。このシナリオの中に卒業生の合唱を織り込んでいく。三年生の文化祭の時に唱った歌を合唱する。感謝のことばの時に「大地讃唱」を合唱するなど「音楽構成劇」風にしたてあげる。こういうとりくみが来賓や父母・下級生に感動を与える。

これらのとりくみは中学の卒業式直前にはむずかしい。公立高校の入試期日が中学の卒業式後という県がかなりあるのである。合否発表だけが卒業式のあと，という県もある。卒業式の日には生徒の進路が確定していない。これでは卒業生が真剣に卒業式の準備にとりくめるだろ

うか。卒業生は卒業式よりも自分の進路にかかわる入学試験に集中せざるをえない。

もうひとつの問題は卒業式がすんだあと，このとりくみの「総括」をする場がほとんどない，ということである。学校行事は，体育祭，文化祭，修学旅行などほとんどのとりくみでおわった後の実行委員会，職員会議での「総括」の時間をとる。とりくみの成果，到達点などを皆で共有し，次年度へのとりくみの引き継ぎができる。ところが卒業式はおわった後，卒業生は学校から出て行ってしまう。教師も次年度の準備をすぐしなければならない。卒業式は他の特別活動とちがって総括がほとんどできない。やりっぱなしに終わってしまう。したがって，それまでの学校のとりくみの積み上げがほとんどできないことになる。

4．自治を育てる観点で

「運動会」と「体育祭」，「学芸会」と「文化祭」はどう違うのだろうか。小学校の時は運動会，学芸会だったが，中学になると体育祭，文化祭になった，という学生が多い。そもそもの語源から言うと「会」と「祭り」の違いということになる。豊臣秀吉が聚楽第に大名などを集めて茶をふるまったのが「茶会」であり，天皇が今でも庶民を集めて花見をするのが「園遊会」，正月に和歌の催しをするのが「歌会」である。「会」は上のものが下のものを集めて楽しませる，ということに由来する。それに対して，農民が豊作を祝っておこなう豊年祭り，漁師が大漁を祝っておこなうのが大漁祭りである。人々が自主的をおこなうものが「祭り」である。

そう考えると，運動会は教師が設定した枠内をおこなうイメージがある。体育祭は生徒が主体的にすすめていくものである。学芸会，文化祭もこれと同じ論理である。しかし，今はこの語源にかかわらず，体育祭と銘打って，教師のひきまわしの行事となっていたり，その逆だったりするので，あまり名称にこだわらなくてもよいのかもしれない。

子どもたちが自分たちで計画し，実践していくことが特別活動のとりくむべきことがらである。教師が計画し，それにそってやらされているだけだったら，子どもたちにとってはあまり意味はない。修学旅行をとりあげてみよう。すべてのスケジュールを教師が決定し（これもさいきんは旅行業者に丸投げ，という例が多い）それに沿ってすすめられるのでは，子どもたちはあまり楽しくない。これでも行ったことのないところを体験する意味はあるかもしれないが，子どもたちが自分たちで希望をだし，交通機関や見学料を調べ，計画をたてる方がよほど意味がある。小集団のグループ行動を企画してすすめることである。この中で訪問先でのさまざまな体験が個別具体的な価値をもってそれぞれの子どもたちにせまってくる。事前の学習が重要になってくる。どこをみたいか，その時々で子どもたちの関心も異なる。交通機関の下調べも欠かせない。もちろん，修学旅行の企画は子どもたちですべてすすめられるほど簡単ではない。東京都の場合，２年前から教師たちは企画を練る。父母や生徒から「行きたい」方面のアンケートをとる。関西にするか，東北にするか，新幹線の乗車がかかっている。「西に」行く場合，毎年２月ごろ全都の中学校の校長が集められ，希望日の抽選がおこなわれる。これで東海道新幹線の「出発日」が決まる。どこで下車するかは学校判断でよい。次は宿舎の交渉である。個別に京都・奈良の旅館と交渉してもダメである。どこの旅館も旅行業者と提携している。大人数の宿泊は旅行業者を通さないとできないしくみになっている。大手の旅行業者が協約し，手数料も12%と協定している。修学旅行の料金が不当に高額になるのはこのためである。プライベイトの個人旅行と比較してみれば，たいへんな高額になることははっきりしている。

それはさておき，子どもたちが自分たちの計画にしたがって，各地をまわる。近くに教師がいない，という解放感と自分たちでやらなくっちゃという責任感で貴重な体験をすることになる。ここで教師は何をするか，というとチェックポイントにたち，途中の点検をおこなう。金閣寺には寺側がテントを設置し，修学旅行の教師のチェックポイントとして提供している。ところがさいきんは班長にＧＰＳ付きの携帯電話を渡し，教師は宿舎でパソコンの場面で「点検」しているだけという例がある。これでは常に教師に「監視」されているようなもので，子どもたちの自治を育てることにはならない。子どもたちの小集団の活動を保障する時，約束づくりが大切である。実行委員会で「決まり」を討議する。大きな問題は「おこづかい」である。自分たちで自由にやりたい実行委員は「無制限」を主張する。このときに「おこづかいをたくさん頂戴」と言えない家庭があることに気づかせれば，お小遣いの額の制限が議論される，と思う。自分たちで決めたことは，自分たちで守ろうとする。心配する親がこれを破ろうとする時，自分たちで決めたことだから，と子どもたちはこれを守ろうとする。教師が決めて，それを指示するだけだったら，その多くは守られない。

修学旅行の意義は友だちと仲を深めることだと思う。何泊か一緒に寝たり，一緒にご飯を食べたり，お風呂に入ったりすることで，その人の本当の姿が見えてくるし，自分自身もありのままの自分をさらけだすことができると思う。また，自主研修などで，自主性や協調性もやしなえる。そのような普段は経験できないことをとおして，自立心が芽生えてくると思う。

それ以前の「自然教室」でもこのことが試される。林間学校を組織する場合，簡単な登山（ハイキング程度の）でも先頭教師についてゾロゾロと山を登っていく，ということになるのだろうか。これでは軍隊の歩行訓練と同じである。そうではなくて，班ごとに時間差をつけて登山する。前の班が見えない程度の時間差をつけて出発する。地図を見て，事前にしっかり学習し，方位磁石の活用などを通した学習も必要になる。迷い安い分岐点には教師がたつなどの配慮も必要になる。また，班内で疲れた子どもが出た時にその子の荷物を分担して持つ，などの配慮ができるか，なども自治を育てる観点で貴重な体験になることは確実である。助け合って，協力して，山登りをした，という体験が大事なのである。このときも教師は体調の変化に気配りしなければならない。最後尾に保健担当教師がつくことはもちろん，途中の体調激変の連絡体制もとっておく必要がある。

5．特別活動の評価

特別活動は教科ではないので，点数による評定はなじまない。ところが受験のとき，中学から高校に提出する内申書に「特別活動」の記載を求めている都道府県もある。いやその方が多い。東京都の例では，特別記載事項の欄があり，在籍者の10％にだけ特別記載事項の記載を認めている。しかもこれを点数化し，生徒会長は４点，部活動の都大会成績優秀は３点，・・・などなどと決めている。教科の評定と同等の扱いがされ，生徒会長をすれば，他の教科の評定が「1」でも「5」と同じになる，という寸法である。こうなると教科の学習より特別活動でがんばった方が入試に有利になる，というぐあいになる。

特別活動には基準がないのに，入試では生徒会や部活動の表彰が点数化されていることは矛盾であると思う。中学生の時，受験に有利だから・・・と委員長に立候補していたり，していました。しかもこれがこっそり点数化されているならともかく（それはそれで問題だが）塾や学校の一部でそういうことを知ってしまっているのは良くないことだと思います。特別活動は競争社会から離れたところにあるべきなのに，特別活動でさえ，利益がなくちゃならない社会になるのは望ましいことではないと感じました。

私の友人は４点がほしくて生徒会長になったと言っていた。何でもかんでも点数化してしまうのはどうかと思うが，それが生徒の意欲に影響を与えるのなら，良いのではないかと思った。

後者の学生は，特別活動の点数化に肯定的である。生徒の意欲につながるのなら，良いと考えている。しかし，これが日常的な競争教育の一局面である，という理解がない。

6．特別活動そのものの軽視

近年，ＰＩＳＡの学力調査の結果をもとに，日本の子どもの学力が低下している，ということが指摘され，文部行政から学校に対して，教科の授業時間数の確保がいわれてきている。学習指導要領の別表に示される「授業時間」が確保されていないため，日本の子どもの学力が低下している，というものである。この点から，教科の授業「時間」を確保できれば，子どもたちの学力は向上するというものである。この論点は，教科の授業の「量」だけを問題にし「質」を問わない，という点で基本的な指摘が違っている。しかし，このことから，教科の授業時間の確保が最優先され，それ以外のことがらを削っていくことになった。まず，長期休業の期間の短縮がはかられた。夏休みを短くして，教科の授業をおこなう。次は二期制である。三期制で三回ずつあった始業式・終業式を二回にして，２日間の授業ができる日を増やした。次は学校行事の見直し，と称する特別活動の軽視である。これまで時間をかけて準備をしてきた学校行事にかける時間を減らす。この浮いた時間を教科の授業にあてる，ということになる。

体育祭の準備に長い時間をかけてきたのを時間を減らす。団体競技を減らし，個人競技を増やす。団体競技は時間をかけて練習しなければうまくできない。個人競技にすれば，各自の調整にまかされるから，準備にかける時間は少なくてすむ。それまで「４段タワー」をつくってきた学校で「３段タワー」にしてしまう。４段だと，学年全体で練習しなければならないから，練習時間をつくりださなければならない。しかし３段なら，クラスで

とりくめる。特別に練習時間をつくりださなくても，クラスでとりくめばよい。さいきんは「危険」だといって「組体操」自体を禁止する教育委員会もでてきた。準備をあまりしないでできる内容になっている。

さらに，文化祭も隔年でよい，などと減らしてしまう学校もある。これでは，子どもたちの継続的なとりくみにならない。3学年しかない中学・高校では，在学中に一度しか文化祭を体験できない子どももでてくる。

私の中学校は文化行事軽視の傾向だったと感じます。なぜなら，合唱コンクールが午前，午後が文化祭だったからです。もちろん，出し物などに準備をかけた記憶もありません。思い出に残らないイベントがあるということが悲しいです。

生徒会活動も生徒全員でとりくむさまざまな活動を減らしてきている。生徒会役員だけが地域の老人施設に訪問し，ボランティアをしてきた，と生徒会新聞に書く。生徒会で全校でとりくんでいく行事を減らして，生徒会役員だけのとりくみにしてしまっている。これも教科の授業時間の確保のための「涙ぐましい」取り計らいとなっている。

こんな状態で，学校行事がへらされ，学校へ来る楽しみと意義が薄まってきているのではないか。学校を豊かな体験の場としていくには，特別活動の時間を確保することは必然であり，これを減らしていくことは，学校本来の目標から考えて，逆行である。

いずれにしても今，学校に問われているのは，どんな子どもを育てようとしているかである。特別活動の時間確保，その指導は集団訓練でいいのか，ということが問われているのである。